

2024 年度大学評価委員会経営部会の評価を受けて

法政大学総長 Diana Khor

2024 年度の「大学評価」および「国際化に関する評価」について、大学評価委員会経営部会より評価を受けた。書面および役員等へのインタビューを通じて、それぞれ 4 名の外部有識者の先生方によって評価が行われた。

「大学評価」では、「学習成果の把握・評価と活用への取り組みについて」が評価項目とされ、教育方針・学習に関する基本方針(ディプロマ・ポリシー (DP))の策定、学習成果の明確化(アセスメント・ポリシー)とその評価・活用、共通教育の開発・推進といった取組が主な評価対象となった。

教育・学習に関する基本方針の策定から授業内容の開発、学習成果の把握・評価、それに基づく改善に至るまで、体系的な取組が着実に進められていることを高く評価された。一方で、いくつかの課題も挙げられている。DP に関しては、すべての学生が各学部等の DP と大学全体の DP の両方を達成できるよう配慮する必要性が示された。また、学修成果可視化システム(Halo)については、学生による授業改善アンケートへの回答率の低さに加え、評価結果と実際の授業改善との連動性、そして教員が学生の理解状況を把握し、迅速に対応する仕組みの必要性が取り上げられた。「サティフィケートプログラム」については、その充実ぶりが評価される一方で、修了者数の伸び悩みや認知度の向上に向けた工夫、さらには企業側に対し履修証明やオープンバッジの意義を効果的に伝えていく重要性にも言及があった。さらに、学生の学修成果を高めていくには、多様な背景をもつ学生自身の主体的な関与が必要であるとの認識が提示された。

国際化については、2023 年度に終了したスーパーグローバル大学創成支援事業(SGU 事業)について、「これまでの取り組み状況」「事業の成果」「課題を踏まえた今後の展望」の 3 つを評価項目とし、この枠組みにおける最終的な外部評価が実施された。SGU 事業の構想とその実現に向けた 10 年間の取り組みに対しては総合的に高い評価が得られた一方で、いくつかの課題も指摘された。構想における未達成目標については、とくに英語運用力に関して対策の必要性が挙げられた。また、学生が在学中あるいは卒業時に、大学が提供するグローバルマインドセット涵養の機会をいかに活かし、自らの知識・スキル・態度の変化に気づくことができるかという点に課題が残る。加えて、教職員が自らのグローバルマインドセットをどのように身につけるか、またグローバルリティやダイバーシティとの関係性をどのように言語化・明確化していくかは、今後の重要な課題である。

DEI に関する国際的動向や 18 歳人口の減少など、社会全体の変化の中で、本学がグローバルリティとダイバーシティをいかに一体的に推進していくか、また「グローバル化」という概念をどのように整理していくかが問われている。これまでの SGU 事業の成果を踏まえ、グローバル大学実現基本方針に基づく、グローバルリティとダイバーシティの一体的な推進をさらに明確化していきたい。